

その日塔公から私を運んでくれた短気な運転手のタクシーは、康定のバスターミナルの前に到着した。ずいぶん長い時間を塔公で過ごしていたような気持ちになっていたが、この前康定を後にしたのは実はほんの4日前だ。康定に残して置いた私の荷物はバスターミナル前に立つビルの中の、香格里拉(シャングリラ)招待所に預けてあった。

この安宿が何軒も詰まったビルはバスターミナルまで徒歩1分と旅の利便性には申し分無かったが、今回はちょっと趣向を変えて違う場所に泊ってみる心づもりがあった私は、運転手に「ちょっと待ってて」とお願いし、急いでビルの階段を駆け上がって宿の中に飛び込むと、のんびりと受付に座っていた招待所の気のいい姉さんに「預けてた荷物を取りに来たの」と告げた。招待所の姉御は「ああ、あなたね」直ぐに察してくれた様子で自分の部屋に置いてあった大きなザックを運び出して来てくれた。

こんな汚れたザックを嫌な顔もせず自室に置いてくれていたとは、やっぱりこの姉さんは気のいい人だ。御礼を言ってザックを背負い再び急いで階段を駆け下りてタクシーまで戻ると、他の客は皆降りてしまっており、私一人の為だけに待たされていた短気な運転手は、既にちょっとイライラしている様子だった。

「ちっ! 小姐、いったい何処に行きたいんだよ」

「ごめんごめん! 近くだからさ」

中国世界からチベット文化圏への入り口となるこの康定は、天空の世界から下界に降りてくるチベット族の人々の都会への玄関口となる町でもあるが、これからチベットエリアに足を踏み入れようという旅行者達の、チベット世界への拠点となる町でもあった。

それ故「住宿」などと記された看板を掲げて軒を連ねる一般中国人向けの安宿とは別に、中国の田舎町には珍しく「ゲストハウス」と呼ばれるような外国人旅行者向けの安宿も存在していた。そのような安宿は旅人用のガイドブックや口コミで宿を訪れる、世界中から集まってきたバックパッカー達の溜まり場となっていて、宿の共有スペースとしてテーブルなどが設えられたリビングでは、そこで知り合った旅人達がお茶などを飲みながら各々の旅の武勇伝や情報交換に花を咲かせて

いるのが常だ。どこの国でもそういった宿にはその土地やオーナーの個性が色濃く反映されていて、お互いそんな宿を泊まり歩いている人間同士で、世界の何処何処の宿が良かったなどと語り合うのも楽しく、旅人達の中にはそんなゲストハウスを渡り歩くこと自体が旅の目的となっているような人もいる。それはそれで楽しいものだが、旅の最中はどちらかといえば興味の対象が土地の人間である私は、これまであえて旅行者同士で交わる事を積極的に求めたりはしていなかったのだが、この日は旅の最終目的地であった塔公からとうとう康定まで戻ってしまった事で、これで旅を終えねばならない寂しさからすっかり人恋しい気持ちになっていた。

そこで、自分と同じバックパッカーの溜まり場と言える安宿へ行けば、きっとこれまでの旅の話を共有できる話し相手が得られるのではないかと、その宿を目指してみる気になったのだ。しかし、黒帳蓬(ヘイザンパオ・黒テントの意)ゲストハウスというその宿は、バスターミナルから重いザックを背負って歩くにはそこそこの距離もあり、どうせだったらタクシーに乗ったまま宿の前まで送って貰いたかった。ところがである、運悪くそのゲストハウスに向かう道は混んでいた。ただでさえ私に待たされ機嫌を悪くしかけていた運転手は、これで更に苛立ちが増してしまい、「駄目だ! 駄目だ! こんな道は行かんぞ! ちゃんと康定まで連れてきたんだ。もうここでいいだろう?」とすっかりヘソを曲げてしまい、なんだかんだで宿までの道中の半分は稼げた私も譲歩して、「判った判った、ここで降りるよ〜、ありがとね」と素直に御礼を言ってタクシーを降りた。

この旅で日本を出たのは7月だったがもう9月に入っていた。だが9月に入ったとはいえ、まだまだ日中の気温は高く、日差しは強い。

タクシーを降りた私は例によって背中に大ザックを背負い、胸に小ザックを担ぎあげ、吐息をつく強い日差しに額の汗を拭いながら宿の方向に歩き始めた。道路脇の歩道をいくらも進まないうちに道の脇から鋭い口笛の音が響いて来たのに気を引かれ、そちらに顔を向けた私は思わず目を見開いた。

ええええええ—————!!!

道端にとめた車の窓から、私に向かって口笛を飛ば

していた人物は、なんと1か月前に往路の稲城で出会ったタクシー運転手、じゃがいも兄ちゃんの次仁扎西(シャーレン・ザーシー)だ。私を乗せて亜丁まで行ってくれる約束をしていながら、出発当日の朝になって約束をキャンセルした憎たらしい奴だが、食事をおごって貰ったり、どうも憎めない愛嬌があったりと、この旅で出会った人間の中でも特に印象深い人物だった。

な、何であなたが此処にいるの~~~~!!??

旅の最後の最後とも言えるこの後に及んで、既に再び過ぎ去った記憶の中の土地となりかけていた稲城亜丁の香りを彷彿とさせる人物に、思わぬ場所で遭遇した驚きと喜びで思わず叫び声をあげてしまった私だが、「稲城から客を乗せて康定まで来たのさ」との彼の言葉にすぐさま納得した。

あちこち寄り道しながら康定まで戻ってきた私には、稲城から康定の道のりはずいぶん長く感じられたが、数年前と比べ道路事情のととのった今では稲城から康定までは1日あれば走ってこられる距離だ。その上四川省チベットエリアの核ともいえる康定には何処の町からも長距離タクシーのニーズがあり、確かに私が稲城滞在していた折にもそこで知り合った旅行者がタクシーをチャーターし康定に向かっていたのを見かけていた。複数人数で割り勘にすれば、チャーター料金もバスに乗るのとそう大差ないだろう。

次仁扎西(シャーレン・ザーシー)が助手席に座った車には、運転席にもう一人真っ赤なTシャツを着こんだ伊達男が乗っており、稲城からは二人交互に運転しながらやってきたらしい。私には赤シャツの彼の事は記憶に無かったが、先方は私の事をどこかで見かけていたらしく、次仁扎西同様、旧知の知人として私に投げかけてくる屈託のない笑顔と態度に親しみが感じられた。

「ところで君は亜丁に行かれたの？」

ちゃんと、自分が私との約束を反故にした事を覚えていたらしい次仁扎西の質問には、思わず苦笑してしまった。

「ところで、どこへ行くんだい？」

「この先のゲストハウスまで」

「送っていくぜ、乗って行けよ」

「やった~~~~!!」

次仁扎西の人柄は稲城で一緒に過ごして判っていたし、とにかく亜丁の知り合いに出会えた事が嬉しくて堪らない私は大喜びで旧友? の車に乗り込んだ。思わぬ仲間が増えて気分が盛り上がったらしい彼らも、「よ

~~し、レッツゴー!!!」と縦列駐車していた車を発進させようと、勢いづいて車をバックさせた瞬間、ガツシャーン!!! という音と衝撃が伝わってきた。

目を見開き顔を見合わせたまま固まってしまった赤シャツと次仁扎西が次の瞬間車を飛び降り、彼らの後を追った私が車の後部に回ってみると、見事に後ろに停まっていた車のフロント部に激突し、砕けたヘッドライトのプラスチックが道路に散らばっていた。

あわわわ~~~~!! やっべえ~~~~! 慌てた二人が車を停めていた脇の広場の縁に立ち、周りの人間に後ろの車を指差すと「あの車の運転手は何処にいるんだ?」と尋ねても、「いや知らないよ」との答えが返ってくるばかりだし、額に手をかざして辺りを眺め渡しても、誰もこちらに注意を向けている様子的人物もいない。

「・・・ってことは？」

「よし!」

「逃げろ~!!!」

二人は慌てて再び車に飛び乗り、「小姐、早く車に乗れ~~!!」との叫び声に追われるように私が車に飛びこむと、車はギュイーーン! と急発進して、急いでその場を立ち去ったのだった。

たまたま自分に再会した為に思わぬトラブルが勃発してしまい、私としては二人に申し訳ないような気持ちでいっぱいになりながらも、一連の出来事はまるでドタバタ漫画だ。

とりあえずその場から逃げおおせたことで、二人とも笑いながらケロツとしている様子だし、私も可笑しいのと申し訳ないのが入り混じった複雑な気持ちで「ごめんね・・・私のせいで」と声をかけると、「気にするなっことよ!」と赤シャツが昭和の伊達男風にきっぱりと答えてくれた。

その後二人はコソコソと裏道を通り、ちゃんと当初の目的だった黒帳蓬ゲストハウスの前まで私を運んでくれると、目立たないように建物の影に車を停めた。

私はゲストハウスにチェックインを済ませ、自分に与えられたドミトリー(相部屋)のベッドの上に自分の荷物を放り出すと、直ぐに二人の待つ車に走って戻った。元々人恋しくてわざわざ便利の悪いバスターミナルから離れた宿までやってきたのだが、既に一緒に過ごせる仲間が出来た今となつては、この宿で時を過ごす意味もなくなっている事にその時は気づいていなかった。

(続く)